ともしび
1993.3
第13号
大学婦人協会東京支部

●セミナーに参加して
●アンケート調査・報告

'92セミナー報告

一九九二年度JAUW全国セミナーが、九月二六日(土)、二七日(日)の二日にわたって嵐山の國立婦人教育会館で開催された。テーマは「環境教育―理念と実践―」、サブテーマとして①地球環境問題とその国際的理解　②家庭　③学校　④職場　⑤地域、であった。

セミナー企画・実行委員会は、東京支部のほかに本部、茨城・神奈川両支部の参加によって組織された。

東京支部としては、研究発表への参加は無かったがセミナー開催へ向けて多くの方が尽力し、相互の連携プレイにより無事役目を果たすことができた。

初日。開会の辞、青木会長の挨拶に続き、各支部・委員会の研究発表で午前中は終了。午後は東京学芸大学教授・小沢紀美子氏の講演が、テーマ「環境教育を根づかせる視点」の許に行われた。最後に四つの分科会①家庭・地域　②初等・中等教育　③高等教育　④諸外国の実践例に分かれてそれぞれ活発な意見が交わされた。

夜の懇親会は、宿泊棟の中にある食堂で開かれた。立食形式で、青木会長や先輩の方々のスピーチの後、茨城支部司会でゲームや歌なども交えた、楽しく和やかなひと時であった。

二日目。房野さんのIFUW総会報告の後、前日に続き各支部・委員会の研究発表があった。そして、次に立正大学教授・福岡克也氏の講演があり、締め括りとして全体討議が青木会長の議長のもとに持たれ、閉会となった。

（磯村明子）

行事報告

7月1日　「ともしび」12号発行
2日　秩父バスツアー（財務委主催）
6日　寺崎マリコ氏講演会
23日　新日鉄君津製鉄所見学
9月19日　「女性の視点から環境問題を考える」
講師―綿貫礼子氏
26日～27日　JAUWセミナー
テーマ〝環境教育―理念と実践〟（本部主催）
11月27日　横浜バスツアー（財務委主催）
12月4日　「カンボジアの歴史・文化と現状について」
講師―ペン・セタリン氏
8日　佃島見学
22日　アルメイダ氏を囲む会（国外奨学委と共催）
1月14日　ズビエダ氏を囲む会（国外奨学委と共催）
16日　国内奨学金贈呈式（国内奨学委、社会福祉委と共催）
23日　新春の集い（本部主催）
31日　尾形光琳、乾山兄弟展見学（財務委主催）
3月1日　「ともしび」13号発行
25日　最高裁判所見学（予定）

国外奨学生を囲む会

十二月二二日、国際文化会館にフィリピンから京都立命館大学に留学中のアルメイダ氏（教育行政学）を迎えた。人集う所歌あるお国ぶり、美声に心和む一時。留学中に対日感も好転されたよし。一月十四日、ボリビアのズビエダ氏を囲む夕食会。最新の医療設備、診療法などを研究し、更にあたたかいもてなしを受けながら異文化をも体験できたと感謝された。国際相互理解と親善も実り、誠に意義深い事業である。

（松沢美仁子）

セミナーに参加して

―支部委員の声―

前記九二年度のセミナーに際して東京支部は、研究発表は見合わせ、峯川支部長の運営委員長を始め、実行委員として参加協力した。その十余名の方々から寄せられた意見等をここにまとめてみた。

〈テーマ・環境教育―理念と実践〉

社会的にも関心の高い問題で、選び方は良かったという意見が多い。ただ「テーマが実際どの様に決められていくのかが解らず、テーマとして取り上げて貰いたい問題があった場合どの様にしたらよいのか、もっと広く全員に呼び掛けては…」という声もある。内容については、大学婦人協会らしい新しい切り口での取り上げを期待し、問題点をもっと絞って掘り下げた方がよかったとか、環境問題に関する企業側の努力を聞き、共に教育に参加すべきとの視点から、企業側の意見をもっと聞く場が欲しかったとするものもあった。

〈研究発表・講演〉　時間不足で研究成果を充分聞けず、一様に残念。神奈川支部、国際第二委員会が印象に残るという。講演は小沢氏、福岡氏共に大変有意義で、「さすがに専門に研究されている方のお話は深みがあり感動した」と。

〈分科会〉　発言者が一部に偏ったり個人的な感想の場のようでと失望を隠せず、「テーマ別に議題がもう少し具体的に知らされていたらと思う」とある。

〈決議文の討議〉　大筋を取りまとめた今回の方式は「例年のような片言隻句にこだわるやり方より遙かにスマート」

総じて実行委員としての手伝いの為、会場に出たり入ったりじっくりと研究発表を聞けなかったり、馴れない仕事に緊張してか内容を少しも覚えていないのは老化の故かと反省しつつ終わってみれば「身の廻りから努力しなければ」と得る所も多いセミナーであった。初参加の委員は、「各地から一堂に会し、貴重な発表の数々なので内々で聞いたり印刷物を流したのでは勿体ないと思います。新聞紙上等、一般の眼にふれる場に掲載し、より有益に活用できないものかと思います。大学婦人協会のPRも兼ねて」と述べている。（既にご意見のような処置はなされての公開行事ですが、もっと積極的にPRをというご意見でしょう。編集部）

〈会場〉　ここ数年、大磯・都心のホテルと続いた。今回の池袋から東武線で一時間余りの地は不便な所との前評判であったが、環境的には緑も多く静かで広々とし、好天に恵まれた事も幸いし好評を得ている。設備は整い、費用は安く無理なく払える額で、この会の趣旨からも好ましいとの声が多い。しかし幹線から遠いので、各地から出席される方々には不便で気の毒、会館の受付にも迷惑をかけたと受付係。当日間際まで万事判らぬ事が多かったと設営係。宿泊棟と研修棟が分かれていて楽しかった反面、急ぐ作業や資料の運搬に車が必要と資料係。次回はもっと交通の便のよい国公立の施設を利用してスマートに行いたいとの要望が多い。

〈運営〉　セミナーは本部主催の行事ではあるが、東京支部としても、本部や首都圏の他支部の方々と協力しサポートしてゆくかなりウエイトの重い行事と受けとめている。委員は事務所での様々な準備、資料などの搬入等、当日参加出来なかった委員も含め「全委員が自分の出来る範囲で協力しよく動いたと思う」一方、「東京支部は所帯が大きい為ややまとまりを欠くのでは。いつも決まった会員ばかりでなく、支部全体の事としてそれぞれに何か役割を持って頂き、参加を求める方法を考えていかなければ…」と全員の参加協力を求める声。「東京支部と本部との係わりが今一つわかりません。事務所のスペースにも原因しているかも…本部の実態がなかなか見えません」と支部の置かれている立場の理解し難さを指摘する声もある。

セミナーも回を重ね実績もできた所で、これ迄の経験を基に〝マニュアル〟をつくってはという意見がある。時期が夏休み後で準備期間が短く、多忙な方が多い等々の事情もある。「ベテランには当然理解していると思われる事が、経験の浅い者にとっては解らずまごつく事もある。セミナーに限らず大きな行事に関して、マニュアルによって事務の全体的な流れ又は全体的構図を把握できた方が、手伝う側としても動き易く、事の理解も早いのではないか…」と考えるのも「色々あっても意義のある行事なので今後発展継続させてほしい」と願ってのことである。

他支部活動紹介

岐阜支部　松井　恵美

岐阜といえば長良川の鵜飼と、今問題の長良川河口堰くらいしか連想していただけない東海地方の中都市だが、それでも二二年の大学婦人協会の支部発足当時は四〇名程の会員があったのである。会員の老齢化による会員減少を埋め合わせる新会員の獲得ができず、只今会員数十一名で細々と和やかに灯を守っている。

活動をしなければ若い人は振り向かぬ、活動の為にはお金も人手も不足という悪循環の中で、最低限、年三回の集まり、春の総会、秋の勉強会、新年の親睦会だけは行っている。

本年は大先輩会員、清水ふく氏がIFUWの大会に出席されたお土産話をうかがうお茶の会をつけ加えることができた。勉強会には岐阜薬科大学公衆衛生学教授の佐藤孝彦先生をお迎えして地球環境問題（水・空気・ゴミ）生物の種の減少、人口問題等をうかがい、問題の深刻さ、我々の無力など痛感したのであるが、私は教師として教材に公害関連のテキストを使い若い人の自覚を促したいと思っている。会員を増やし若い世代に任せられる日を待っている。

講演会

「女性の視点から環境問題を考える」　綿貫　礼子氏

―チェルノブイリのその後―

例年にない猛暑も一段落、秋の気配が立ち始めた九月一九日、環境問題研究家、綿貫礼子氏の講演会が女性情報センターで開かれた。

一九七〇年代、まだエコロジーに関する講座がどこにも開かれていなかった頃、いち早くこの問題に関心を寄せられ、お仲間とプロジェクトチームを作り、政治・経済と関連づけて取り組み始められたという。

ベトナム戦争で使用された枯葉剤に含まれていたPCBダイオキシンによって、多くの妊娠異常が起きている事が判明した後、子供を産み育てている女性の立場から、より深く事態を直視し、より早く警鐘を鳴らす必要性を痛感されたのであった。

一九八六年のチェルノブイリ原発事故は、戦時下で起きたのではなかった。当初旧ソ連当局は、汚染はごく狭い地域にすぎないと発表したが、それは偽りだったのである。かなり離れた白ロシアの、ある勇気のある女医によって、事故後、子供達の白血病の発病率が異常に高くなってきているという発表がなされた。綿貫氏は、直ちに現地を訪ねられ、病児の母親達から悲惨な状況を聞かれたのである。多くの子供達が死に、又胎児は殆ど生まれる前に死んでいたという。

一旦このような大事故が発生したとき、人類はいかに無力なことか。放射性物質はダストと共に周辺諸国に飛散し、いかなる高度なテクノロジーもそれを阻止できなかったのだ。学者達はただ、「子供を産まない事が好ましい」と警告するだけだった。

自然と共に人間の生命を守り続けていくため、今こそエコロジカルエシックス（環境倫理学）を確立し、それを歯止めとして社会を変えて行くべきだと訴えられた。

生化学者として出発され、女性独自の感覚で研究活動を続けられ、母親達の悲しみ、苦しみを、手を取って分かち合ってこられた綿貫氏のお話は、日本の現在直面している問題を真剣に考える良い機会を与えて下さったと思う。なお、多くの方がご著書「誕生前の死」を買い求められ、この問題に対する会員諸姉の関心の高さを垣間見た思いがした。

（有澤公）

サークル紹介

⇩俳句会　毎月第二月曜日
十二時半～四時　於　事務所
「馬酔木」同人、村上光子氏指導

⇩読書会　毎月第二火曜日
一時半～三時半　於　事務所
〝世界史をよむ〟の一環として
今「論語」次は「唐詩選」の予定

⇩英語会　毎週金曜日
一時半～三時
於　東京都女性情報センター
「イギリス史」講師石塚英子氏
会費　十回で一万二千円

⇩古典講座　毎月第二・四月曜日
一時半～三時
於　千駄木　潮見会館
講師は山川正子氏。十回五千円

⇩東京漫歩くらぶ　随時

◎サークルについてのお問い合わせ、ご希望は左記へどうぞ。

俳句会　八四八三一二〇九一（佐藤）
読書会　〇四三二一九四一二八八九（岩野）
英語・古典　三六八四一八三〇七（峯川）
東京漫歩くらぶ　（右同）（峯川）

東京支部アンケート調査・報告

はじめに

〝ともしび〟前号に添えてお願い致しましたアンケート調査にご協力いただき、ありがとうございました。皆様からの回答をもとに、会員係の委員が名簿整理と平行して、集計・分析を行いました。いただいた回答は多種多様であり、なかなかまとめにくいところもありましたが、一応ご覧いただきたいと存じます。回答のなかには、これからの東京支部の企画・運営に参考となる内容がたくさん含まれておりますので、今後の指針として使わせていただきたいと存じております。

これからも折あるごとに皆様のご意見ご要望を気楽にお寄せいただきたく、今回回答されなかった方も含めて引き続き私たちの大学婦人協会及び東京支部に充分関心をもってご参加くださいますようお願い申し上げます。

（峯川正子）

一、概要

実施期間　平成四年六月～九月

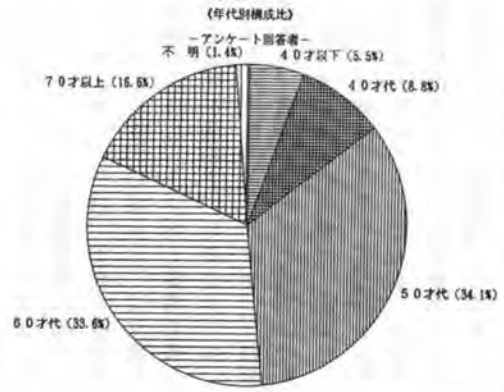
対象　東京支部会員約六〇〇名

調査内容　支部会員の現状調査と当会への要望他

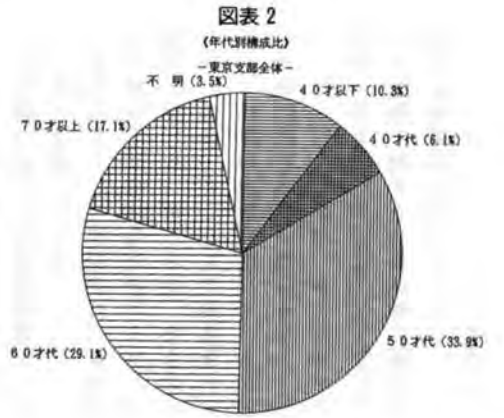
回収率　三七％（二二二通）

〔年齢構成　図表（1～3）〕

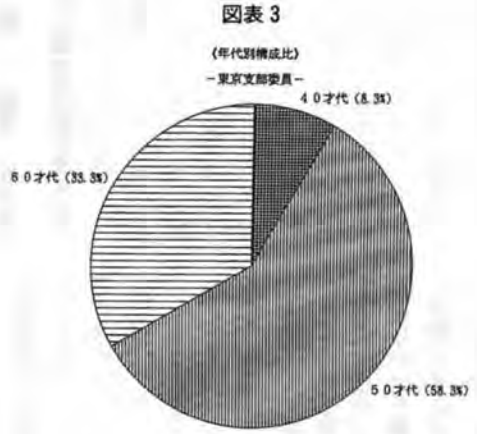
図表1



図表2



図表3



二、年齢構成から見た東京支部

図表1、2を重ね合わせると、各年代別の比率は殆ど変わらず、結果的には年代の比率に応じてアトランダムにサンプリングしたことになったと言えよう。

六〇歳以上の会員が約半数を占め、まさに高齢社会である。四〇歳代及び四〇歳以下の年代が少ないのは心細い気がするが、この年代は、仕事に家庭にとまだ現役であることを思えば、仕方がないことであろうか。七〇歳代の方は長年会員として尽力され、今も会に関心を持ち続けておられる方が多いことは回答からも汲み取れるが、残念ながら健康上の理由などで参加できない方も多い。

したがって現在の支部行事に参加活躍されている方々の年齢は、六〇歳前後が殆どということになろうか。ちなみに現東京支部委員の年代構成は図表3となっている。

三、東京支部の行事について

参加経験あり　七〇％

内容　講演会・見学会・支部総会　バス旅行

参加経験なし　二八％

不参加理由　仕事の為・時間なし

希望する行事　見学会、講演会、講座が多数、特に「個人では行き

にくい場所」への見学希望が多い。
又かつての連続講座「民族と平和」のようなものが望まれている。

四、支部の常設サークルについて

参加経験あり　一九％
所属サークル　古典講座　読書会等
参加経験なし　七〇％
不参加理由　多忙、時間が合わない
仕事のためが多い

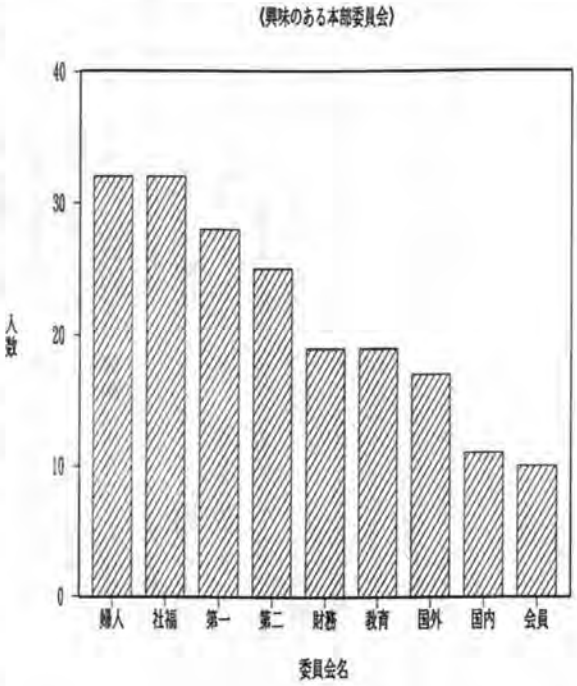
五、本部主催の行事について

参加経験あり　五九％
内容　セミナー　新春の集い
総会　バスツアー　奨学金授与式
殆ど全行事に参加の人もあった。
参加経験なし　三二％
希望行事　セミナー見学
セミナーのテーマを続けて勉強したいという声もある。
不参加理由　時間がないが大多数。

六、関心のある本部委員会は？

回答者の関心は図表4のようになっている。本部委員会の活動は会の中心をなしており、それぞれ活発に行われているが、残念ながら会員全体に理解されていないのではないかと懸念する。本部委員会についての項目に無回答者が四二％もあったことはこれを裏づけていよう。〝ともしび〟12号誌上の各委員長からの紹介記事だけでは、今ひとつ身近に感じられない会員も多いと考えられる。

図表4



七、現在関心があるものは

1、見学　2、講演会・講座
3、ボランティア（V）活動

見学希望　美術館　大使館　史跡

講演テーマ　時事問題　芸術問題

V活動　老人福祉・留学生援助

講座　語学

八、行事に参加しやすい日時

平日　七〇％
土・日・祝日の午後　少数
全部ダメ　一〇名

九、会員の現状

約四三％の方が職業を持ち、中でも教育関係の仕事が多く、大学に勤務されている方が全体の二〇％もあるということは、当協会の性格上当然とはいえ、大きな特徴である。
所有する資格も、教員免許証（大多数）をはじめ、博士号、弁護士、医師、上級職公務員等々知的に高度なものが多い。茶華書道の師範も多い。特技としては、英語、英会話、日本語教師、翻訳等が目につく。
社会活動への関心は、特に老人問題とかかわるV活動等、前述の通りであるが、次いで文化交流（異文化交流―アジア諸国との文化交流等）教育問題（生涯教育、女子教育）、女性問題（女性の生き方、地位向上等）がある。V活動については前述以外にも、視覚障害者に対する朗読、点字翻訳、拡大本製作等、多岐にわたる。また、画廊を提供して美術に関するボランティア希望の方もある。趣味は芸術鑑賞（音楽、美術、演劇）、スポーツ、絵画、手芸、俳句、和歌、旅行等である。

一〇、東京支部への提案

・実際に社会に貢献する活動を
・会員同士の交流の場を
・若い人の入会を促進するように
・高齢化社会への対応
・ネットワーク作り
・老人介護
・滞日外国人との交流
・合唱団、オーケストラをつくろう
・経済的にも参加しやすい催を

以上、どれも重みのある真摯な提案。「入会直後なのでよろしく」とのコメントも幾つかあり、入会はしたものの、とまどわれている姿が想像できる。会員同士の交流の場、またはネットワーク作りの必要性が浮かんでくる。参加費の問題も高齢化、また若い会員獲得とも関係する課題で

ある。

一一、本部への提案

この項目は、特に設けたわけではないが、全体を通して本部にも共通すると思われる声を拾ってみた。

・先ず第一にPRに力を入れ、若い会員を増やして欲しい（多数）

・机上の空論ではなく国内外に実際に貢献すること（多数）例えば今回の平和学研究奨学金等

・奨学生の会への関心度を調査し、会員として定着し協力する為の働きかけをもっと活発にして欲しい。

一二、まとめ

先ず年齢的に六〇歳前後を中心に機能している高齢社会であること、これは支部の行事を考える時無視できない。とはいえ、わが会員の五〇、六〇歳代は一般の水準より遙かに好奇心、知識欲、奉仕の精神等どれもまだまだ旺盛である。したがって〝企画は若い人並に、行動はゆとりをもって〟となろう。それにしても、四〇歳以下が一〇%というのは余りに少な過ぎる気がする。本部支部共に若い世代にアピールする方法を再考すべき時機であろう。

長い間会の為に尽力された七、八〇歳代の方々の回答には、心暖まるものが多い。会への関心、愛情を常に持たれているが、残念なことに実際の活動には参加されていない。しかし、すばらしい先輩の方々が見守ってくださるということは貴重で大変心強いことでもある。

また、かつて会の為に献身的な働きをされた方々に、再び会への関心を喚起できるようなよい企画を考えられないものだろうか。この会ならではの、評判のよかった「民族と平和」のような質の高い企画が望まれる。

更に、何か生きがいのあること、社会に貢献したいと模索されている方には、V活動、老人問題等の情報が提供できれば会の存在価値も更に高まるであろう。実際に役立つ行動を、という声は、具体的に実践的な活動を望む人が多いと考えられる。

いずれにしても、当協会の活動は、会員一人一人の熱意と努力なくしては成り立たない。今後も魅力ある東京支部を築き上げてゆく為に、お互いの力をもっと結集してゆこうではありませんか！

（有本玲子　駒木三枝子　鈴木光子　藤枝史子　溝淵ひろ子　山村敬子）

講演会

カンボジアの歴史 文化と現状について

ペン　セタリン氏

12月4日女性情報センター

今日、火中にあるカンボジアについては、これまで私たちはあまり知らなかったようです。今回、この国からいらした婦人が日本でこんなにも活躍されていることを知り驚きました。セタリンさんのユーモア溢れる、スライド上映も含めた、2時間余りのお話に、すっかり魅せられてしまいました。その明るさ、強さの裏には、平和な生活にどっぷり漬かっている者には想像もつかない辛い体験があることも知りました。

かつてクメール文化の栄えた王国カンボジアは隣国や大国の支配が続き、一九五三年フランスから独立、平和な農業国への希望も束の間、すぐ隣国、ベトナムに内戦が始まりそれに大国の介入や内外権力者の野心がからみ、カンボジアもまた戦場になりました。国連PKO部隊の派遣にもかかわらず、未だ治安は回復されていません。

セタリンさんは、一九七四年、国費留学生として来日、東京外国語大学付属日本語学校を経て、八一年東京学芸大学・大学院で教育学修士課程を修了。その間、母国の内乱は激化し、家族との音信も絶え、数年後に、ご両親を含め家族の大半が犠牲になったことが分かりました。以来、日本にとどまって、両国の懸橋として、様々な分野で活躍しておられます。最近、NHK・朝日新聞社の現地取材に通訳として協力され、故国の現状を見て来られました。本年一月一日、NHKのアンコール・ワットからの実況放映は、私たちにも深い感動を与えましたが、同行されたご本人の感慨は如何ばかりであったでしょう。

一方、十八年間の滞日中に、結婚してお子さんを育て、レストランを経営する傍ら、難民の人達の相談相手をする生活を通して、一般日本人の異文化についての無理解を強く体験されました。「日本人・大好き」といわれるセタリンさんの日本人批判は、国際的な協会の会員として、特に私たちが考えなければならない問題だと思いました。（青木満里子）

（なお、ペン　セタリン氏の著書二冊は、寄贈図書紹介欄を参照下さい。）

寺崎マリ子氏を囲んで

日米の懸橋として活躍されている寺崎マリ子氏が昨年来日され、有本副支部長との長い友情のおかげで、楽しく且つ有意義な会を住友クラブで七月六日開催することができました。（通訳・大森たへ子氏）

寺崎氏の生い立ちについてはグッエン寺崎氏の「太陽に架ける橋」や、それらを源にして「マリコ」を柳田邦男氏が発表され、それがNHKでドキュメンタリードラマとなって一九八一年の終戦記念日に放映され話題となったのでご存知の方も多いと存じます。純白のスーツに身を包まれ会場の一人一人と微笑みながら握手され、一同その美しさに魅了されてしまい、もうすぐ六〇歳を迎えられるとは思えない程のバイタリティ溢れる若さでした。

約二時間に及ぶお話の中で終始強調されていたのはご自分が日本人の父とアメリカ人の母との間に生まれたことにより二つの文化を持てたこと、但し日米戦争により思いがけず歴史の嵐の中に巻き込まれていってしまったこと、特に父親が外交官だったことからその大事件の渦中で育った為に、自然に日米の懸橋たらんとする自分になっていったということでした。中でも、お父様の思い出の〝どてら〟のお話はとても印象的でした。どてらがとてもお好きだったお父様は、時々あの大きいどてらを着て大きく手を広げお母様を抱いて〝ごらん！何て大きい人間なんだろう！私とお母さんが一緒になるとこんなに大きくなるんだ〟と、日米はこの〝どてら〟にならなければいけないと何時も話されていたそうです。伝統を重んじ古い歴史を有し優雅さを尊ぶ日本人、若さを誇りとし国自体は古くはないが民主主義という歴史は古い良きアメリカ人、常にその両国民の持つ素晴らしさを機会ある毎に両国民に語りかけるのが自分の使命であるというマリコ氏は、さながら民間大使の感がありました。

目下ワイオミング州キャスパーで民主党員として積極的に政治にも取り組んでおられ、当時は候補者だった新大統領クリントン氏支持の熱弁を奮っていらしたのが印象に残っております。今は勝利の喜びと共にホッとなさっていることでしょう。

新日鉄君津製鉄所を見学して

「鉄は国家なり」と国の基幹産業として近代鉄鋼業が八幡（北九州市）の地に誕生してから九〇年、その経験と最新の技術の粋を集めて君津製鉄所は一九六八年操業を開始。当時、民族の大移動と称された下請業の人々をも含めた転勤風景は話題となった。その君津に委員の阿南さんのお世話で見学が実現し、勇躍参加ということになった。房総線の特急で約一時間、君津に到着。送迎バスに乗って総務の方の説明を受けながら晴天下、街路樹の間を一路製鉄所の玄関に。応接室では所長直々のご挨拶、続いて概要についてフィルムを観たりしながら説明を受け、質問にも答えて頂く。かつての古い製鉄所のイメージとは程遠く明るいクリーンな風景、まさに環境問題等を配慮した二〇世紀後半ならではと感嘆。昼食は池に面したゲスト用グリル？で中華のフルコースのお饗し。各テーブルには幹部の方が同席、話が弾む。工場の見学服のデザイン等一切任された若い女性社員達はケンゾーの高弟に相談、完成品を初めて見せられた所長さんはしばし絶句された由。赤とグレーのツートンカラーで両袖も色違い、大胆かつ斬新、新しい製鉄所にぴったり。我々オバサン族も後に喜々？として白手袋、赤いヘルメットと共に着せて頂いたが、見学者の主流を占める日本のオジサマ族のご感想を承りたいもの。

さてりりしく身を固めたところで最初にその象徴たる熔鉱炉見学をする。炉の壁面に埋め込まれた百種類、千個のセンサーが集めた温度・発生ガス・燃料・鉱石等のデーターをコンピューターが処理し指示、たった六人で操作されているとは！全く働く人影はなし。炉心の色を穴から覗き一三〇〇度を実感、だが熱さは後からの送風の故か覚悟した程でもない。所がである。次の圧延工場、これ又総オートメーション、人影もなく、ただ圧延ローラーの上で何度も灼熱の鉄塊が圧延され、冷水の放射を浴び、もうもうと熱蒸気を上げながら長い工場の先端で巻き取られ製品となってゆくのだが、灼熱の鉄をお供に、高いブリッジを歩きながら見学する時の熱さ、高炉の比ではなかった。灼熱地獄をチョッピリ体験して次は構内をバスで移動、研究所

へ。かつて全国に散らばっていた施設を君津に統合、最新の設備と頭脳を集めてオープン。所内に入ると、研究の合間、疲れた頭を休めたり仲間と語り合う空間の多さに驚く。コンピューターを低いボードで仕切った個人のセクションが沢山並ぶ大部屋、個室、様々な目的にそって作られている。大きな窓から見渡せる広い芝生の所々には近隣の小・中学生が実生から育てた土地の樹木等が移植され、目を和ませてくれる。私共も後日、ささやかながら見学のお礼として、「エゴの木」（カット）を贈らせて頂いた。最後に鉄製のナイフや文鎮を記念に頂き、お世話下さった方々への感謝と充足感に満ちて帰途に着いた。（七月二三日）

佃島行

一二月八日午後、地下鉄月島駅に一九人が集合、佃島中学校に向かう。古典講座のメンバーを主に、新発足の東京漫歩くらぶの面々、偶々、佃島中の奥原校長先生が峯川支部長のお知り合いで、ご案内下さるとの話にとびつき、失われゆく東京の下町の面影を求めてというのは表向き、本音は佃煮ともんじゃ焼きにひかれ、かくなった次第。川岸に立派な超高層ビルが林立する、どこかの国の大使館かと見紛う建物が佃島中であった。この最新設備のいたれりつくせりの校舎に学ぶ生徒達は、向かい側の超高級マンションや昔からの佃島・月島の住人とか都営・公団住宅の子供達で、まさに今の東京の縮図の趣があるとのこと。墨田川両岸を一望に見渡しながら、佃の住吉神社の祭礼風景等、ビデオを地元の方の解説で観せて頂いた。その後は現地を散策、昔の灯台（今トイレ）や立派で珍しい八角神輿を特別に見せて頂く。大橋が架かり佃の渡しも無くなった島は、かつての情緒も薄れ佃煮屋も数える程、何かさびしい限りである。佃煮を買い終った頃、怪しかった天気が崩れ雨、お目当てのもんじゃ屋やじろべいに急ぐ。

テレビでしか知らなかったもんじゃ焼きは文字通りナンジャ？といった感じ、でも皆大満足。ビールを飲み、お好み焼きや焼きそばを食べ、今日一日の締め括りとして子供に帰った様な楽しい一時であった。

次回には是非ご参加下さいませ。

「東京漫歩くらぶ」誕生

以前から当支部では〈下町めぐり〉などを行って参りましたが、今回新たに「東京漫歩くらぶ」が発足しました。既に日暮里―上野、月島―佃島を探訪しています。会員以外の方でもメンバーとして登録されますので、お友達共々ご参加下さいませ。

連絡先　峯川正子
〇三―三六八四―八三〇七

〝三越劇場へのお誘い〟

日時・六月十二日（第二土曜）
演目・三越歌舞伎
出演・中村橋之助　尾上辰之助他
料金・8、500円
申込・事務所又は財務委員会
三百席予定しています。お友達お誘い合わせて、大勢ご観覧ください。
（企画・財務委員会）

●行事案内（一九九三年度）

四月一日　JAUW第三六回総会
於熊本　有志出席
四月二四日　東京支部総会
於國立教育会館

〈JAUW平和学研究奨学金創設について〉

私たちの地球上では現在でも、イスラエルとアラブの対立、東欧諸国内の民族間の争い、カンボジア問題等、毎日何処かで紛争が起こり銃声が絶えません。当会では唯一の原爆被爆体験国の女性として平和を希求する切なる気持を結集し、紛争解決のための研究に貢献したいと願っております。一九九五年のIFUWの日本での総会を目途に実現させたく、皆様のご協力をお願いいたします。

名　称　JAUW平和学研究奨学金
目標額　五〇〇万円
送金先　三菱銀行　大久保支店(056)
口座番号　（普）0272453
口座名　JAUW平和学研究奨学金
代表者　中村ミチコ

秩父路へ

奥津　成子

平成四年七月二日今期初の財務主催のバスツアーは大型バス二台にて秩父巡りを行った。古くからの秩父霊場信仰の中心地秩父市内とその周辺の札所二ケ所の見学であった。

梅雨の走りの候故、集合時の新宿は、無情の雨にバスも、前日より幾つもの照々坊主を作った委員達の顔も濡れていた。しかし超晴々女多数の我々の念力が天に通じたのか、秩父市内に入る頃から雨も遠のき、一同〝やった！〟と快哉を叫ぶ。

市内は先ず加藤近代美術館、武甲酒造を交互に見学する。美術館は明治の機問屋の屋敷をそのまま使った建物自体趣深く、又展示品も内外の充実した名品が揃い、かなりの手応えを感じた。武甲酒造では本年の品評会で金賞の銘酒や味のよい土産物に一同の手荷物がふえた。

昼食前に急ぎ秩父夜祭で名高い秩父神社を参拝、甚五郎の龍その他の彫刻を拝殿より仰ぎ、夜祭の華麗な山車鉾の展示されている祭会館に入場、勇壮な夜祭のテレビを見、一二月三日のその祭に思いを馳せた。

昼食は秩父そば定食を加藤美術館直営のイートピアで、我々中高年には量もお味もまずまずのものだった。

これより秩父霊場札所二三番音楽寺に向かう。この寺は秩父全市を見渡せる山の頂にあり、明治の秩父困民党の蜂起の際、寺の鐘を鳴らして襲撃したことで有名である。晴れたおかげで何とか市内を眺められ鐘を撞いて往時を偲んだ。札所四番金昌寺のひなびた千余体の石仏やマリア観音等の見学希望の方々が多く、時間切れの危い所で人・車の協力にて何とかカットせず廻ることが出来た。帰路は関越道の渋滞に巻き込まれず新宿着となった。

秩父は東京近郊でありながら俗化が進まず取り残されたような古い寺々が点在し、再度訪れたいと思う場所である。急げ急げの盛沢山の行程だったことが何より悔まれたが、梅雨期に無事一日の見学が終えられたことを財務委員一同心より喜んだ。

横浜バス見学会

羽山　昭子

晩秋の十一月二七日、平成七年にＩＦＵＷ国際大会が開かれる予定の横浜ＭＭ21地区周辺の見学会が行われた。参加者百三名、バス二台に分乗し、先ず横浜税関に向かう。

周知の通り、日本の食料自給率は低い。輸入食品の量は膨大で、そのチェックが困難なことはよく分かる。しかし生命に直結するものだけに検査・検疫・蔵置状況など、消費者ももっと関心を持つべきだと思った。

次にベイブリッジのスカイウォークを楽しみ、熱いコーヒーで一服。昼食は磯子のプリンスホテルでしゃれたセットメニューをいただく。

午後は日本石油・根岸製油所の見学。ここは国内最大の製油所で、日本石油精製㈱の½を生産している。横浜市に毎年五十億円の税金を納めているそうだ。石油業界は①原油の99.7％を輸入――供給基盤が脆弱②製品の品質では各社変わりがない――価格競争　③市場規模の割りに精製に参入する会社が三十社余と多い　等の特徴があること。国家予算70兆円のうち石油業界が納める税金は4.6兆円になること（因みに、消費税は約6兆円）。第1次石油ショックで価格が高騰したため、火力発電や鉄鋼工業が石炭やＬＮＧを使用するようになり、重油の需要が減少したこと等説明を受けたのち、バスで67万坪の所内見学。桟橋では二隻のタンカーが荷下ろし中だった。予定時間を大分超え、五時過ぎ心から感謝して辞去した。

国内奨学金贈呈式に出席して

一月十六日㈯午後二時よりストラーダ新宿に於て一九九二年度贈呈式が行われた。一般奨学生（院生、学部生）17名、安井医学奨学生1名、ホームズ奨学生1名、社会福祉奨学生5名で北は北海道、南は沖縄からの出席であった。奨学生達の真摯な態度と内容豊かなスピーチに時のたつのを忘れてしまう程だった。大学婦人協会のはたしている意義を再確認できる良い機会であった。

東京支部新入会員

（1992年12月現在）

氏名	出身校	住所	氏名	出身校	住所
飯野導子	聖心		坂井英子	信州大	
関口瑞穂	実茶		宮原陽子	大女	
秋月薫			秋田圭子	大女	
有澤公子	東女学		天野節子	実	
奥原美恵子	青東		岩本裕子	津教院	
佐藤睦子	津女		大河内春乃	立筑波	
斉藤加代子	大津		岡部雅子	日女	
坂上栄美子	アイオワ女		斎藤治子	日女	
笹沼澄子	日東女		鈴木伸子	日日女院	
梅ヶ枝和子	聖心女		高田素子	日東京女院	
玉置京子	聖心女		木地真理子	聖心	
出口佐登子	聖心女		玉井美枝子	昭女	
橋本津栄子	日茶		横関祐美子	I. C. U.	
比留間淑乃子	聖日		稲川朋子	津	
藤枝史子	日日奈		基太村洋子	日女	
溝渕ひろ子	聖奈		石口由美子	Wake Forest U.	
松原茂々代子	日実		大湾知子	琉球大	
山中裕子	聖心		小堀貴子	慶エダンフォード院	
中山律子			田中幸子	U. of Iowa	
吉本栄子			末延由美子	東女	
荒川恵津子			高橋俊子	I. C. U.	
石山純子			高橋康子	慶	
河邊和子			福田文子	早	

ともしび　十三号　発行日　一九九三年三月一日　発行　大学婦人協会東京支部　ともしび編集部
〒160 新宿区新宿七―十七―八戸山マンション二四一号　Tel〇三―三二〇二―〇五七二　印刷　タナカ印刷㈱

望月泰子	実	92年5月8日
東浦めい	東女	92年5月20日
福島ユキ	広島女	92年12月23日
藤田たき	津プロテスタント	93年1月4日

＝謹　弔＝

◎**寄贈**

今年も左記の方々より支部へご寄付を戴きました。御礼申し上げます。

伊能　美智子氏　三〇、〇〇〇円
五十嵐　康子氏　一〇〇、〇〇〇円
綿貫　礼子氏　二、〇〇〇円
S. G. L.　五九、五二六円
平野　和子氏　五、〇〇〇円
井上ジェムス　一三六、三〇〇円
熊切　富子氏　一〇、〇〇〇円
姫野　昌子氏　一、〇〇〇円
R. I. JAPAN　二五、〇〇〇円
支部各サークル　計五〇、〇〇〇円

◎**寄付　例年の様に左記の所にささやかながら歳末の寄付をいたしました。**

○愛隣会（目黒区）
○留学生相談室

◎**寄贈図書紹介**

・「私は「水玉のシマウマ」カンボジア女性の日本奮闘記」
ペン　セタリン著　講談社

・「日本語・カンボジア語辞典」
ペン　セタリン他著　めこん社

・「一年で社説が読めた」
姫野昌子外二名共著　研究社出版

編集後記

○国際化社会に相応しい皇太子妃内定の報。癸酉の年の始め、明るい未来の予感にご同慶の至りです。（A）

○年が明けて、雨が多く寒い日が続いていますが編集室は暖かく、部員一同元気で楽しく仕事をしています。（S）

○支部長と担当委員の大変なご努力で、アンケートの実施と分析が行われました。今後の運営に生かされ、支部活動が活性化していくことを期待しています。（H）

○ヨチヨチ歩きの新米編集員として先輩に迷惑をかけない様にと一所懸命努力しつつ和気あいあいの雰囲気の中で仕上げる喜び！　やめられない！（F）

○昨年の特集号巻頭に貴重な草創期のお話を寄稿下さった初代の会長藤田たき先生が逝去されました。感慨一入です。ご冥福をお祈りいたします（T）